C-3　オリヤ語における、同一格制約の効力が｛ない｜ある｜強くある｝構文

山部 順治（熊本大学）jjyamabe@kumamoto-u.ac.jp

キーワード： 1. オリヤ語（印欧語、インド東部）；2. 統語論、類型論；3. 格、主語、意志性

要旨　文中で同じ格で標示されている２個の名詞句を、**同一格ペア**と呼ぶ。オリヤ語では同一格ペアが排除されることがある。この事象を**同一格制約**（短く、本制約）の効力と呼ぶ。本制約に関係する格は、目的格、所格、奪格の３種である。

オリヤ語では、本制約の効力は、同一格ペアが置かれている構文文脈の特徴によって、｛Aない｜Bある｜C強くある｝の３種の場合に分かれる。典型的主語（意味的には動作主、統語的には主格の主語）を欠くという特徴が、文中に１点含まれている場合は、B（効力あり）に該当し、同一格ペアの名詞句は線形的に連続して生起できない。２点含まれている場合は、C（効力強）になり、同一格ペアは介在する表現で隔てられても生起できない。その他の種類のいわば基本的な構文では、A（効力なし）になり、同一格ペアの名詞句は連続して構わない。オリヤ語の事象は次の点で特異である。(i) 本制約は、同一格ペアが現れる構文環境の特徴を問題にするのであり、同一格ペアじたいの特徴には関知しない。(ii) B,C間での効力の差は、典型的主語の欠如という特徴の個数の違いに由来する。本制約に複数の下位種があることに由来するのではない。

本発表の構成は次のとおり。第1節は、オリヤ語の格の区別を示す。第2節と第3節は、本制約の例証である。第2節は使役関係を表わす諸構文、第3節は使役主を含意しない諸構文における事実観察を提示する。最後に第4節では、日本語の類似現象と対照し、オリヤ語の事象の特異性を浮き彫りにする。

1.　格の区別

オリヤ語において形式的に区別される格は、(1)の５つである。主格はゼロ形、他４つが１音節。本発表では属格を除く１音節の格３つについて観察する。３者は、異形態を示し、大多数の名詞・代名詞に付くいわば代表的な形式と、特定の数点のあるいは狭い範囲の形態素に付く形式とで使い分けがある。

(1)

		代表的な形式	特定の数点の／狭い範囲の形態素に付く形式	
主格	NOM	ϕ		
目的格	OBJ	*-ku*	*-te*	*mo-te*「私」、*to-te*「お前」
所格	LOC	*-re*	*-Thi*	*dokani-Thu*「店主(人)」、 *se-Thi*「そこで」
奪格	ABL	*-ru*	*-Thu*	*maNTu-Thi*「モントゥ(人)」、*se-Thu*「そこから」
属格	GEN	*-ra*		

本発表の例文では次の用法に留意されたい。目的格OBJは、二重他動詞の間接目的語と直接目的語に現われうる。所格LOCは、場所（部屋で）だけでなく、道具（布で）にも付く。

2.　使役関係を表わす諸構文

第2節では、(2)の述語を持つ諸構文を扱う。(i)形態的使役は『元の動詞-使役接辞』の１語、(ii),(iii)迂言的使役は『元の動詞　動詞』の２語からなる。文中で被使役者は目的格OBJで標示される。（加えて、(i)の文では、被使役者は後置詞「によってdvaaraa」で標示してもよい。）３者のうち(i)(ii)の例文を提示する。

(2)

i. *poch-e-*	ii. *poch-baa paai~ baadhya kar-*	iii. *poch-e-i de-*
wipe-CAUS-	wipe-INF forced do-	wipe-CAUS-CP give-
拭かせる	拭くようにさせる	拭くことを許す

同一格制約の効力の強さは構文によって相違する。諸構文を効力の強さによって｛Aない｜Bある｜C強くある｝の３類に分類すると、(3)のようだ。A類の文では、同一格ペアは可能だ。B類の文においては、同一格ペアは線形的に連続して現れない。C類の文においては、同一格ペアは互いに離れても現れない。

(3) A. 単文、人（使役主）主語の迂言的使役
B. 人（使役主）主語の形態的使役、非情物（原因）主語の迂言的使役
C. 非情物（原因）主語の形態的使役

この事実観察は、以下のように記述できる。B,C類に属する構文については、文中に(4)の構造的特徴(ア),(イ)が含まれる。文（のどこか）から典型的主語を失わせる特徴である。B類の構文では(ア),(イ)のいずれか1個が含まれ、C類の構文では両方が重ねて含まれる。

(4) (ア) 統語的に、主格の主語を欠く。
第2節の事例では、元の動詞の節が、縮約され主語位置を失っている。
(3)の(i)の形態的使役ではそうなっており、(ii),(iii)の迂言的述語ではそうなっていない。
(イ) 意味的に、動作主を欠く。
第2節の事例では、使役文の主語が、人（使役主）でなく非情物（原因）である。

このような文においては、同一格ペアは(5)の制約によって排除される。C類の文では、B類の文と比較して、(4)の特徴が累積するだけ(5)の制約の適用回数が累積し、結果、由来する効力の強度が増大する。

(5) **同一格制約**：(ア)や(イ)の特徴を構文文脈においては、同一格ペアは排除される。

2.1 目的格ku 以下の例文では、不適格性をもたらしている同一格ペアの格語尾にマーカを塗る。A,B,Cの例文記号は(3)の構文類に対応している。(6)の例文Aは、二重他動詞（見せる）が述語の単文であり、典型的主語（あの方）を持つ。ここでは同一格制約は適用されず、目的格の同一格ペアが現れる。例文Bは、形態的使役であるのに応じて埋め込まれた節（部屋を掃除する）は統語上の主語を欠き、(4)の(ア)の特徴を含む。Cでは、使役文の主語が非情物（あの方の指示）で、(4)の(イ)の特徴が重ねられている。BとCでは、同一格制約(5)により、目的格の同一格ペアをなす名詞句の連続は排除される。なお、(5)のA～Cでは、動作対象が主格（ゼロ語尾）なら問題ない。

(6) A. *saar gunu-**ku** {tebul-Ti｜ tebul-Ti-**ku**} dekhe-il-e.*
sir Gunu-OBJ table-CL table-CL-OBJ show-PAST-3PL （一人を指示する複数PLは尊敬を表わす）
あの方は、グヌに**ku** テーブルを｛ϕ｜**ku**｝見せた。（単文、二重他動詞文）

B. *saar gunu-**ku** {tebul-Ti｜ *tebul-Ti-**ku**} poch-e-il-e.*
sir Gunu-OBJ table-CL table-CL-OBJ wipe-CAUS-PAST-3PL
あの方は、グヌに**ku** テーブルを｛ϕ｜***ku**｝拭かせた。（形態的使役文、人が使役主）

C. *saaranka kathaa hi~ gunu-**ku** {tebul-Ti｜ *tebul-Ti-**ku**} poch-e-il-aa.*
sir's word EMP Gunu-OBJ table-CL table-CL-OBJ wipe-CAUS-PAST-3SG
あの方の言いつけが、グヌに**ku** テーブルを｛ϕ｜***ku**｝拭かせたのだ。
（形態的使役文、非情物が原因）

(7)のように、B類の構文では、同一格ペアをなす２語の目的格名詞の間に１語（下線部）が介在すると、同一格ペアは可能になる。介在する１語とは、名詞修飾の小辞（その）であってよいし、名詞句の外部にある句（布で）であってもよい。一方、C類の構文では、同一格ペアは、語を介在させても良くならない。

(7) B. *saar gunu-ku se tebul-Ti-**ku** poch-e-il-e.*
sir Gunu-OBJ that table-CL-OBJ wipe-CAUS-PAST-3PL
あの方は、グヌに**ku** その テーブルを**ku** 拭かせた。

B'. *saar gunu-ku kapaDaa-re tebul-Ti-**ku** poch-e-il-e.*
sir Gunu-OBJ cloth-LOC table-CL-OBJ wipe-CAUS-PAST-3PL
あの方は、グヌに**ku** 布で テーブルを**ku** 拭かせた。

C. * *saaranka kathaa hi~ gunu-**ku** se tebul-Ti-**ku** poch-e-il-aa.*
sir's word EMP Gunu-OBJ that table-CL-OBJ wipe-CAUS-PAST-3SG
あの方の言いつけが、グヌに**ku** その テーブルを **ku** 拭かせたのだ。

C'. * あの方の言いつけが、グヌに**ku** 布で テーブルを**ku** 拭かせたのだ。

Cを本制約から救うには、(8)のように、目的格の異形態**te**を使う。(6),(7)のCの「グヌ」を「私」に替える。

(8) C. *saaranka kathaa hi~ mo-**te** {tebul-Ti | tebul-Ti-**ku**} poch-e-il-aa.*
sir's word EMP Gunu-OBJ table-CL table-CL-OBJ wipe-CAUS-PAST-3SG
あの方の言いつけが、私に**te** テーブルを {ϕ | **ku**} 拭かせたのだ。

目的格の同一格ペアについては、一方が、同一格ペアの現れる構文文脈の特徴的部分を占める。2.1の使役文においては、目的格の一つが、使役を表わす構文(2)にとって必須の要素である被使役者を標示するものだ。したがって、目的格の場合だけを観察しても、同一格制約にとって肝心な条件が、（本発表の主張するように）同一格ペアがどんな構文文脈にある、なのか、同一格ペアじたいがどんな文法的性格である、なのか、判別できない。以下2.2, 2,3では、奪格や所格の場合を観察する。これらの格は、付加詞を標示し、構文文脈となる使役構文の特徴的部分にカブらない。にも関わらず、これらの格についても、目的格の場合と全く同じしかたで、構文文脈が相違に応じて同一格制約の効力は相違する。

2.2 奪格ru A類の構文においては、奪格**ru**の連続が可能である。B,C類の構文においては、不可能だ。

(9) A. *stri mo-te {bhor-**ru** | dokaana~-**ru** | bhor-**ru** dokaana~-**ru**}*
wife me-NOM daybreak-ABL shop-ABL daybreak-ABL shop-ABL
jinisa aaN-ibaa-ku baadhya ka-l-e.
thing bring-INF forced do-PAST-1SG
妻は私に {朝から**ru** | 店から**ru** | 朝から**ru**店から**ru**}
ものを買って来るようにさせた。（迂言的使役、人が使役主）

B. *strinka jor anuroadha hi~ mo-te {bhor-**ru** | doaakana~-**ru** | *bhor-**ru** dokaana~-**ru**}*
wife's strong request EMP me-OBJ daybreak-ABL shop-ABL daybreak-ABL shop-ABL
jinisa aaN-ibaaku baadhya ka-l-aa.
thing bring-IMF forced do-PAST-3SG
妻の強い要請が私に {朝から**ru** | 店から**ru** | *朝から**ru** 店から**ru**}
ものを買ってくるようにさせたのだ。（迂言的使役、非情物が原因）

C. *strinka jor anurodha hi~ mo-te {bhor-**ru** | dokaana~-**ru** | *bhor-**ru** dokaana~-**ru**}*
wife's strong request EMP me-OBJ daybreak-ABL shop-ABL daybreak-ABL shop-ABL
jinisa aaN-e-il-aa.
thing bring-INFCAUS-PAST-3SG
妻の強い要請が私に {朝から**ru** | 店から**ru** | *朝から**ru**店から**ru**}
ものを買って来させたのだ。（形態的使役、非情物が原因）

語（下線部）を介在させると、B類では良くなる。C類では良くならない。

(10) B. *strinka jor anuroadha hi~ mo-te bhor-**ru** jinisa-guDaa dokaana~-**ru** aaN-ibaaku baadhya ka-l-aa.*
wife's strong request EMP me-OBJ daybreak-ABL thing-CL shop-ABL bring-IMF forced do-PAST-3SG
妻の強い要請が私に　朝から**ru** その品物を 店から**ru**　買ってくるようにさせたのだ。

C. **trinka jor anurodha hi~ mo-te bhor-**ru** jinisa guDaa dokaana~-**ru** jinisa guDaa aaN-e-il-aa.*
wife's strong request EMP me-OBJ daybreak-ABL thing-CL Shop-ABL thing-CL bring-CAUS-PAST-3SG
妻の強い要請が私に　朝から**ru** その品物を 店から**ru**　買って来させたのだ。

C類を救うには奪格の異形態**Thu**を使う。(9),(10)の例文Cの非情物「店」を人「店主」に替える。

(11) C. *strinka jor anurodha hi~ mo-te bhor-**ru** dokaani~-**Thu** jinisa aaN-e-il-aa.*
wife's strong request EMP me-OBJ daybreak-ABL shopkeepr-ABL thing bring-CAUS-PAST-3SG
妻の強い要請が私に　朝から**ru** 店主から**Thu**　ものを買って来させたのだ。

C'. 妻の強い要請が私に　朝から**ru**　その品物を　店主から**Thu**　買って来させたのだ。

2.3　所格re　A類の構文においては、所格**re**の連続が可能である。B,C類の構文においては、不可能だ。

(12) A. (?) *baapaa chuaa-Ti-ku raati-**re** Tibhi-**re** sinemaa dekhe-il-ee.*
father child-CL-OBJ night-LOC TV-LOC film show-PAST-3PL
お父さんは、子供に　夜**re**　テレビで **re**　映画を見せた。（二重他動詞）

B. **saar pilaa-Ti-ku raati-**re** kapaDaa-**re** Tebul poch-e-il-e.*
sir kid-CL-OBJ night-LOC cloth-LOC table wipe-CAUS-PAST-3PL
あの方は、使用人に　夜**re**　布で**re**　テーブルを拭かせた。（形態的使役、人が使役主）

C. **saaran-ka kathaa hi~ pilaa-Ti-ku raati-**re** kapaDaa-**re** Tebul poch-e-il-aa.*
sir's word EMP kid-CL-OBJ night-LOC cloth-LOC table wipe-CAUS-PAST-3SG
あの方の言いつけが、使用人に 夜**re**　布で**re** テーブルを拭かせたのだ。（形態的使役、非情物が原因）

語（下線部）を介在させると、B類では良くなる。C類では良くならない。

(13) B. *saar pilaa-Ti-ku raati-**re** Tebul-Taa kapaDaa-**re** poch-e-il-e.*
sir kid-CL-OBJ night-LOC table-CL cloth-LOC wipe-CAUS-PAST-3PL
あの方は、使用人に　夜**re**　テーブルを　布で**re**　拭かせた。

C. **saaran-ka kathaa hi~ pilaa-Ti-ku raati-**re** Tebul-Taa kapaDaa-**re** poch-e-il-aa.*
sir's word EMP kid-CL-OBJ night-LOC table-CL cloth-LOC wipe-CAUS-PAST-3SG
あの方の言いつけが、使用人に 夜**re** テーブルを 布で**re** 拭かせたのだ。

C類を救う手立ての１つが、所格の１個を同義の前置詞dvaaraa「～によって」に替えることだ。

(14) C. *saaran-ka kathaa hi~ pilaa-Ti-ku raati-**re** Tebul-Taa kapaDaa **dvaraa** poch-e-il-aa.*
sir's word EMP kid-CL-OBJ night-LOC cloth-LOC table by wipe-CAUS-PAST-3SG
あの方の言いつけが、使用人に 夜**re** テーブルを 布によって**dvaaraa** 拭かせたのだ。

3.　使役主を含まない、主格主語を欠く文

第2節で見た事例においては、使役主が文に組み込まれるのに伴って、元の動詞の節が典型的主語を失なっていた。第3節では、使役者が文中にいない。(15)の(ア),(イ)のしかたで文が典型的主語を欠いている。

(15) (ア) 統語的に、主格の主語を欠く。
第3節の事例では、文が主語位置を欠く（非人称受動構文）。あるいは、文の主語が主格でなく目的格で標示される（与格主語構文）。

（イ）意味的に、動作主を欠く。
第3節の事例では、文の主語が、動作主ではなく経験者である。（与格主語構文）

同一格制約の効力による構文分類において、B類（効力あり）には(16)の(i)の非人称受動構文、C類（効力強）には(ii),(iii)の与格主語構文が属する。(i)非人称受動構文「見せられる」と(ii)斜格主語構文「見える」は、述語が同形であることに注意。(i)「見せられる」の文では、動作主が含意され、随意的に後置詞dvaaraa「によって」で標示可能。以下では、B類を(i)で、C類を(ii)で例示する。A類の例文は能動文である。

(16)
dekh-aa *ga-*
show-GER go-
i. 経験者がOBJ　対象を見せられる（B類）
ii. 経験者にOBJ　対象が見える（C類）

iii. *poch-i* *aas-*
wipe-CP come-
経験者がOBJ 拭きかたが分かる（C類）

3.1　目的格ku　A類の構文においては、目的格**ku**の連続が可能である。B,C類の構文においては、それが不可能だ。目的格は、動詞（見せる、見える）の必須項を標示している。

(17) A. *aaji* *maalika* *maNTu-ku* {*gaaDi-Taa* | *gaaDi-Taa-**ku***} *dekhe-il-e.*
today owner Montu-OBJ vehicle-CL vehicle-CL-OBJ show-PAST-3PL
今日、主人は　モントゥに**ku**　車を｛ϕ｜**ku**｝見せた。（能動文）

B. *aaji* *maNTu-ku* {*gaaDi-Taa* | **gaaDi-Taa-**ku*} *dekh-aa* *ga-l-aa.*
today Montu-OBJ vehicle-CL vehicle-CL-OBJ show-GER go-PAST-3SG
今日、モントゥは**ku**　車を｛ϕ｜***ku**｝見せられた。（非人称受動文）

C. *kintu* *manTu-ku* {*gaaDi-Taa* | **gaaDi-Taa-**ku*} *dekh-aa* *ga-l-aa* *ni.*
however Montu-OBJ vehicle-CL vehicle-CL-OBJ show-GER go-PAST-3SG not
しかし、モントゥは**ku**　車が｛ϕ｜***ku**｝見えなかった。（与格主語構文）

語（下線部）を介在させると、B類では良くなる。C類では良くならない。

(18) B. *maNTu-**ku*** *aaji* {*gaaDi-Taa* | *gaaDi-Taa-**ku***} *dekh-aa* *ga-l-aa.*
Montu-OBJ today vehicle-CL vehicle-CL-OBJ show-GER go-PAST-3SG
モントゥは**ku**　今日、車を｛ϕ｜**ku**｝見せられた。

C. *kintu* *manTu-**ku*** *seThu* {*gaaDi-Taa* | **gaaDi-Taa-**ku*} *dekh-aa* *ga-l-aa* *ni.*
however Montu-OBJ that-ABL vehicle-CL vehicle-CL-OBJ show-GER go-PAST-3SG not
しかし、モントゥは**ku**　そこから　車が｛ϕ｜***ku**｝見えなかった。

C類を救うには目的格の異形態**te**を使う。上の例文の「モントゥ」を「私」に替える。

(19) C. *kintu* *mo-**te*** (*se-Thu*) {*gaaDi-Taa* | *gaaDi-Taa-**ku***} *dekh-aa* *ga-l-aa* *ni.*
however me-OBJ that-ABL vehicle-CL vehicle-CL-OBJ show-GER go-PAST-3SG not
しかし、私は**te**　（そこから）車が｛ϕ｜**ku**｝見えなかった。

3.2　奪格ru　A類の構文においては、奪格**ru**の連続が可能である。B,C類の構文においては、それが不可能。奪格（および次節の所格）は、目的格と違い、文述語にとって付加詞句を標示している。

(20) A. *saar* *manTu-ku* { *se kaaraNa-**ru*** | *aarambha-**ru*** | *se kaaraNa-**ru*** *aarambha-**ru*** }
sir Montu-obj that reason-ABL beginning-ABL that reason-ABL beginning-ABL
chabi-Taa *dekhe-i-le* *ni.*
picture-CL show-PAST-3PL not

あの方は、モントゥに｛だから**ru**｜初めから**ru**｜だから**ru** 初めから**ru**｝
写真を見せなかった。（能動文）

B. *manTu-ku* ｛ *se kaaraNa-**ru*** ｜ *aarambha-**ru*** ｜ **se kaaraNa-**ru*** *aarambha-**ru*** ｝
Montu-OBJ that reason-ABL beginning-ABL that reason-ABL beginning-ABL

chabi-Taa dekh-aa ga-l-aa ni.
picture-CL show-GER go-PAST-3SG not

モントゥは、だから**ru**｜初めから**ru**｜*だから**ru** 初めから**ru**｝
写真を見せられなかった。（非人称受動文）

語（下線部）を介在させると、B類では良くなる。

(21) B. *manTu-ku se kaaraNa-**ru*** *chabi-Taa aarambha-**ru*** *dekh-aa ga-l-aa ni.*
Montu-OBJ that reason-ABL picture-CL beginning-ABL show-GER go-PAST-3SG not

モントゥは、だから**ru** 写真を 初めから**ru** 見せられなかった。

C類では、語（下線部）を介在させても良くならないが、奪格の異形態**Thu**を使うと良くなる。

(22) A. *saar se kaaraNa-**ru*** *chabi-Taa* ｛*nija siT-**ru*** ｜ *se-**Thu*** ｝ *dekh-i paar-il-e ni.*
sir that reason-ABL picture-CL self's seat-ABL there-ABL see-CP can-PAST-3PL not

あの方は、だから**ru** 画が｛自分の席から**ru**｜そこから**Thu**｝ 見ることができなかった。（能動文）

C. *saaran-ku se kaaraNa-**ru*** *chabi-Taa* ｛**nija siT-**ru*** ｜ *se-**Thu*** ｝ *dekh-aa ga-l-aa ni.*
sir -obj that reason-ABL picture-CL self's seat-ABL there-ABL see-GER go-PAST-3PL not

あの方は、だから**ru** 画が｛*自分の席から**ru**｜そこから**Thu**｝ 見えなかった。

3.3 所格re A類の構文においては、所格**re**の連続が可能である。B,C類の構文においては、不可能。

(23) A. *saar chuaa-maanan-ku klaas-**re*** *mesin-**re*** *phil-Taa dekhe-il-e..*
sir child-PL-OBJ class-LOC machine-LOC film-CL show-PAST-3PL

先生は、子供たちに授業で**re** 機械で**re** 映画を見せた。

B. **aaji chuaa-maanan-ku klaas-**re*** *mesin-**re*** *philm-Taa dekh-aa ga-l-aa..*
today child-PL-OBJ class-LOC machine-LOC film-CL show-GER go-3SG

今日、子供たちは、授業で**re** 機械で**re** 映画を見せられた。

語（下線部）を介在させると、B類では良くなる。

(24) B. *aaji chuaa-maanan-ku klaas-**re*** *philm-Taa mesin-**re*** *dekh-aa ga-l-aa..*
today child-PL-OBJ class-LOC film-CL machine-LOC show-GER go-3SG

今日、子供たちは、授業で**re** 映画を 機械で**re** 見せられた。

C類は、語の介在では改善せず、所格を同義の後置詞**dvaaraa**「によって」に替えて初めて良くなる。

(25) A. *saar klaas-**re*** *aajikaali nija casamaa-**re*** *bhala bhaabe akhyara dekh-i paar-u naah-aanti.*
sir class-LOC recently self's glasses-LOC well script see-CP can-PROG be. not-3PL

先生は、授業で**re** 最近 自分のメガネで**re** よく字が見ることができない。

C. *saaran-ku klaas-**re*** *aajikaali* ｛**nija casamaa-**re*** |*nija casamaa **dvaaraa***｝ *bhala bhaabe dekh-i paar-u naah-aanti.*
sir-OBJ class-LOC recently self's glasses-LOC self's glasses by well see-CP can-PROG be. not-3PL

先生は、授業で**re** 最近 ｛*自分のメガネで**re**｜自分のめがねによって**dvaaraa**｝よく字が見えない。

4. 日本語との対照

第4節では、オリヤ語と日本語を対比して、オリヤ語の事象の特異性を浮き彫りにしたい。

日本語における同一格制約は「一つの文の中に二つ以上のヲ格目的語が現れてはならない（柴谷1978:262

など）」と記述される。同一格ペアじたいの特徴（ヲ格である、目的語である）が問題だ。(26)のA#〜C#のように、適格度に３段階が観察される。目的語という条件に関しては、一方の名詞句がC#のように目的語である場合は強く排除され、反対にA#のように付加詞であれば制約を免れる。B#では中間的なのに応じて弱く排除される。B#とC#とで適用される制約は文法的性格が相違する：B#では“表層的”（音型に関する）制約、C#では“抽象的な”（格付与に関する）制約である（Saito & Hoshi 2000:269-271など）。ヲ格という条件に関しては、他の機能的に有標な格（デ、ニ、カラ）の重出は排除されない。(Hiraiwa 2010）。

(26) A#. 太郎は 急な坂**を** 自転車**を** 一生懸命押した。(柴谷 p.262) 「急な坂を」：付加詞
B#. ??メアリーが ジョン**を** 浜辺**を** 歩かせた。 (Saito & Hoshi, p.270) 「浜辺を」：場所項
C#. *メアリーが ジョン**を** 本**を** 読ませた。 (Saito & Hoshi, p.270) 「本を」：目的語

オリヤ語においては、A,B,C類の構文の間で適格度の相違をもたらす要因は、同一格ペアを取り巻く構文文脈（どんな環境）である。同一格ペアじたいの文法的特徴（何者であるか）ではない。具体的には、その形態的分類が何格であるか、格付与の由来が文法的であるか意味的であるか、それが付いている名詞句の地位が目的語ないし必須項であるか付加詞であるか、という区別は関与的ではない。文法的性格に関しては、B,Cどちらの類において適用されるときにも、形態的（表層的）である。同一格の異形態どうしは“違う”と見なされる。こう考えると帰結として、場合BとCの間に見られる効果の強さの相違は、同一格制約の下位種が２点あって両者の文法的性格の相違（表層的と抽象的）から起因する、と想定する余地はない。

諸言語に見られる類似の同一格制約については、日本語の事象と同じく、文中で近接する同一格ペアじたいが何者であるかが問題にされる（例えば、Mohanan 1994, Richards 2009）。オリヤ語は、そうでないタイプ　ー文中の近接する同一格ペアが、それじたいについては何であれ、どんな環境にいるかー　であって、既存の知見から見ると特異である。なお、私の以前の分析（山部2013）は、オリヤ語の同一格制約が目的格に適用される場合を取り上げて、同一格ペアをなす２個の目的格の付与され方（つまり、同一格ペアじたいが何者であるか）を取り沙汰すものだったが、経験的に適切でない。

Bの場合とCの場合の間の効力の違いは、本制約の適用回数による。C類の構文のように、文が典型的主語を欠くという特徴が累積すると、効力が増大する。B類の構文のようにこの特徴が１個だけなら、制約の効力は線形的に局所（２名詞句の連続）にしか及ばない。線形的局所性は規則の適用条件で指定されていない。

記号 ABL=ablative, CL=classifier, CP=conjunctive participle, EMP=emphasis, GER=gerund, INF=infinitive, LOC=locative, OBJ=objective, PAST=past, PERF=perfect, PL=plural, PROG=progressive, SG=singular, 1/2/3=1st/2nd/3rd person, ϕ = bare form.
オリヤ語の発音　*a* [ɔ], *aa* [a], *D,L,T* = retroflex, ~= nasalization.

参照文献

Hiraiwa, Ken (2010) The Syntactic OCP. *The proceedings of the 11th Tokyo Conference on Psycholinguistics*, pp.35-56. Hituzi.
Mohanan , Tara (1994) Case OCP: A constraint on word order in Hindi. M. Butt *et al*., eds., *Theoretical perspectives on word order in South Asian languages*, pp.185-216. CSLI.
Richards, Norvin (2009) Locality and linearization: the case of Kinande. *Gengo Kenkyu* 136, pp.75-92.
Saito, Mamoru & Hiroto Hoshi (2000) The Japanese light verb construction and the minimalist program. Roger Martin *et al*., eds, *Step by step: essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, pp.261-295. MIT Press.
柴谷方良(1978)『日本語の分析―生成文法の方法―』大修館書店
山部順治(2013)「オリヤ語における二重目的格制約」『日本言語学会第147回大会予稿集』pp.296-301.
_____ (2017)「オリヤ語における、同一格の連続を許す構文環境と、許さない構文環境」『日本言語学会第154回大会予稿集』pp.164-169.